

川曲柳橋Ⅳ遺跡

接合建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020.7

前橋市教育委員会
学校法人 昌賢学園
技研コンサル株式会社

川曲柳橋 IV 遺跡

校舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020.7

前橋市教育委員会
学校法人 昌賢学園
技研コンサル株式会社

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは總社・元總社地区に山王廃寺、國府、國分僧寺、國分尼寺など上野国の中核をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた肥橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回報告書を上梓する川曲柳橋Ⅳ遺跡は、市の南西部に位置し、校舎建設に伴う発掘調査です。調査の結果、平安時代の天仁元年（1108年）の浅間山噴火に伴う軽石に覆われた水田跡が発見されました。この水田跡は、高崎市日高遺跡に代表される日高条里との関連を考えられ、平成6年度に実施した柳橋遺跡、平成16年度に実施した川曲柳橋Ⅱ遺跡と隣接して条里水田の広がりを今に伝える貴重な遺跡です。現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、開発者である学校法人昌賢学園をはじめ、関係機関や各方面の多くなるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められことができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和2年7月

前橋市教育委員会

教育長 吉川 真由美

例　　言

- 1 本報告書は学校法人昌賢学園校舎建設に伴う川曲柳橋IV遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および整理事業の体制は下記のとおりである。

遺跡名	川曲柳橋IV遺跡（前橋市遺跡コード：1 A 252）
遺跡所在地	群馬県前橋市川曲町宇柳橋 153 番 1 ほか
監理指導	並木史一（前橋市教育委員会）
調査担当	中村岳彦（技研コンサル株式会社）
調査員	茂木佑輔（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間	令和2年3月23日～4月17日
整理事業期間	令和2年4月20日～令和2年7月31日
調査面積	1,520 m ²
発掘調査参加者	秋山 修 新井 實 安藤三枝子 五十嵐光子 池田正恵 上沢公一 宇賀神光 宇貴美代子 大畠吉司 岡 真 小田切幹緒 河本ちさと 北爪二郎 小菅登喜雄 小林克宏 後藤次雄 佐藤文江 塩野谷和夫 須田一雄 関根ちさと 高津邦道 高橋一巳 高橋兼司 多田ひさ子 立川千栄子 田所順子 中島三郎 中鶴知恵子 二木純夫 平井国榮 平野 始 星野 博 松下 明 横堀久子
整理作業参加者	杉田友香 細野竹美

- 3 本書の編集は茂木が行い、原稿執筆はIを並木史一（前橋市教育委員会）、他を茂木が担当した。
- 4 本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管している。
- 5 下記の機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。

株式会社亦野建築設計事務所 山下工業株式会社

凡　　例

- 1 挿図中に使用した北は座標北である。
- 2 揿図に国土地理院発行1/200,000『宇都宮』『長野』、1/25,000『前橋』、前橋市発行1/2,500都市計画図を使用した。
- 3 遺構名称は、溝跡：W、ピット：Pである。
- 4 遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。
溝跡・ピット・その他・・・1/60 全体図・・・1/300
- 5 本文および表中の計測値については（ ）は現存値を表す。
- 7 主な火山降下物等の略称と年代は次の通りである。
As-A（浅間A軽石：1783）、As-B（浅間B軽石：1108）、Hr-FP（榛名二ッ岳伊香保テフラ：6世紀中葉）、
Hr-FA（榛名二ッ岳渋川テフラ：5世紀末～6世紀初頭）、As-C（浅間C軽石：3世紀後葉～4世紀前半）

目 次

はじめに

例言・凡例

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	2
III 調査の方針と経過	4
IV 基本層序	5
V 遺構と遺物	
1 遺路の概要	7
2 第1面	7
3 第2面	9
4 第3面	9
VI 発掘調査の成果と課題	12

挿図目次

Fig. 1 遺路の位置	1	Fig. 6 W-1~6, P-1~4、畦畔	10
Fig. 2 周辺遺跡図	3	Fig. 7 W-3・6、畦畔、1号河道	11
Fig. 3 調査区位置図	4	Fig. 8 本遺跡周辺の条里型施設	14
Fig. 4 基本層序	5		
Fig. 5 全体図	6		

表目次

Tab. 1 周辺道路一覧表	3	Tab. 2 As-B軽石下水田計測表	9
----------------	---	---------------------	---

写真図版目次

PL. 1 1区北側As-B軽石下水田面全景（上が北）
1区南側As-B軽石下水田面全景（上が北）

PL. 2 2・3区As-B軽石下水田面全景（北から）
1区北側大畦畔全景（北から）
1区南側大畦畔全景（南から）
水田面足跡全景（西から）
W-6号溝全景（北から）
1区2・3面全景（北東から）
1区1号河道全景（北から）
調査区南壁断面（北から）

I 調査に至る経緯

平成30年12月、川曲町の学校用地を利用目的とした農地転用に際して、埋蔵文化財の取扱いについて前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）へ照会があり、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「前橋市0333遺跡」内であり、文化財保護法第93条第1項の届出を提出する必要がある旨を開発事業者である学校法人昌賢学園（以下「開発者」という。）あてに回答する。校舎建設の計画が具体化した令和2年1月10日、開発者より文化財保護法第93条第1項の届出及び、試掘確認調査依頼が提出された。これを受け、市教委で同年1月22日に確認調査を実施した結果、平安時代末の浅間山噴火により降下した軽石に覆われた水田が検出された。工事計画の変更による遺跡の現状保存に向けて協議を進めたが、計画変更が困難であることから、工事により現状保存の困難な校舎建設部分及び浄化槽設置部分について、記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意に至った。

令和2年2月3日付で開発者から市教委へ埋蔵文化財発掘調査依頼が提出された。市教委では他の発掘調査を実施中のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要綱」に則り、市教委の作成する調査仕様書に基づく監理・指導の下、民間調査組織による発掘調査実施とした。同年3月13日付けで開発者と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託の契約が締結されるとともに、両者に市教委を加えた三者で協定を締結し、発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「川曲柳橋Ⅳ遺跡」（遺跡コード：1A252）の「川曲」は町名、「柳橋」は旧小字名を採用した。「Ⅳ」は、過年度に実施した発掘調査と区別するために付したものである。

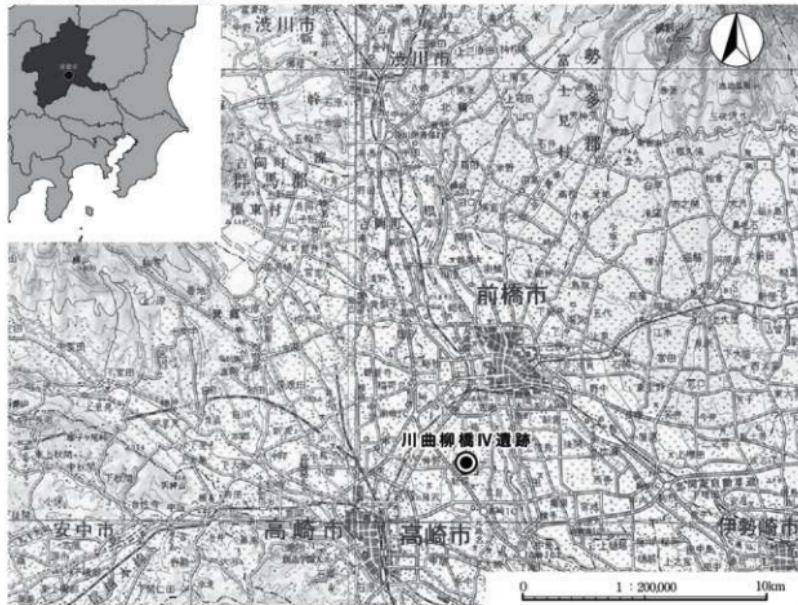


Fig. 1 遺跡の位置

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置 (Fig. 1)

川曲柳橋IV遺跡はJR新前橋駅から南へ約2.5km、前橋市川曲町字柳橋153番1他に所在する。遺跡地の標高は約94mで、北から南へ傾斜した緩斜面地に立地する。本遺跡が立地する前橋台地は、約24,000年前の浅間山の山体崩壊で発生した岩屑なだれが利根川を流下し、その堆積物（前橋泥流堆積物）が基となっている。泥流堆積後の台地上は、表層に形成された中小河川による侵食・堆積作用を受けるが、これらの流路は次第に安定し、現在の平坦な地形が形成されたと考えられる。台地の北西側は榛名山南西麓に広がる相馬ヶ原扇状地に接する。北東側は広瀬川低地帯が帶状に広がり、台地との境界が明確である。遺跡の西と東にはそれぞれ染谷川と滻川が流れ、約2km東には台地中央を利根川が流れている。現在の台地上はこれらの河川が形成した微高地と後背湿地から成るが、利根川は、かつて広瀬川低地帯を流れていたと考えられ、天文年間（1532～1554年）に人工的かあるいは洪水によって現在の流路に移動したと考えられている。また、滻川は江戸時代初期に天狗岩用水の一部に取り込まれている。本遺跡は後背湿地にあたり、周囲には水田も多い。近年、幹線道路である新前橋川曲線が開通し、沿線は開発が進み建造物が増えている。

2 歴史的環境 (Fig. 2, Tab. 1)

縄文～古墳時代 縄文時代は新保田中村前遺跡（53）、日高遺跡（56）等で遺物が出土しているが、遺跡は少ない。弥生時代は櫛島川端遺跡（29）、西島遺跡群（48）、西島相ノ沢遺跡（49）、新保田中村前遺跡（53）、日高遺跡（56）で住居跡や墓坑が検出されている。新保田中村前遺跡（53）や日高遺跡（56）ではAs-C軽石下水田が検出されている。また、新保田中村前遺跡では弥生時代と考えられる河道跡が検出されている。木製品等の遺物が出土し、河川利用の痕跡が確認されている。近隣の川曲地蔵前遺跡No.3（7）でも縄文から弥生時代と推定される河道跡が検出されており、本遺跡でも詳細な帰属時期は不明だが古代以前に埋没したと推定される河道路が検出されている。古墳時代は、6世紀初頭のHr-FAやその後のHr-FA洪水層に覆われた小区画水田が京日・不動西遺跡2（41）、新保遺跡（52）、新保田中村前遺跡（53）等で検出されている。この時代の集落は六供中京安寺遺跡（23）、櫛島川端II遺跡（28）、西島相ノ沢遺跡（49）で確認されており、これらの集落は河川沿いの微高地等に形成されている。

奈良・平安時代 条里型地割に基づいた水田の最初の施工時期は明確にはわかっていないが、前橋市内の中原遺跡群では、条里地割に基づいた水田が検出されており、時期は9世紀前半と考えられている。本遺跡の所在する川曲町は、天仁元年（1108年）の浅間山の噴火によって降下したAs-B軽石に覆われた水田跡の検出事例が多い。As-B軽石下水田の畦畔は、基本的にほぼ東西・南北方向に延びている。坪境の大畦畔も、川曲地蔵前II遺跡（6）、川曲地蔵前遺跡No.3（7）、川曲阿弥陀西遺跡No.2（11）、川曲阿弥陀西遺跡No.3（12）、川曲鳥野遺跡（13）で確認されている。また大畦畔の特徴として、川曲地蔵前遺跡No.3（7）、川曲阿弥陀西遺跡No.2（11）、川曲阿弥陀西遺跡No.3（12）で検出された南北大畦畔は、中央に溝が掘られている。この溝は水路として機能していたと考えられている。なお、本遺跡付近ではAs-B軽石降下後に、再度水田として復旧することはなかったようである。また、この時代の集落も微高地に形成されており、六供中京安寺遺跡（23）、公田東遺跡（30）、新保町遺跡（51）、新保遺跡（52）、新保田中村前遺跡（53）で奈良～平安時代の住居跡が見つかっている。

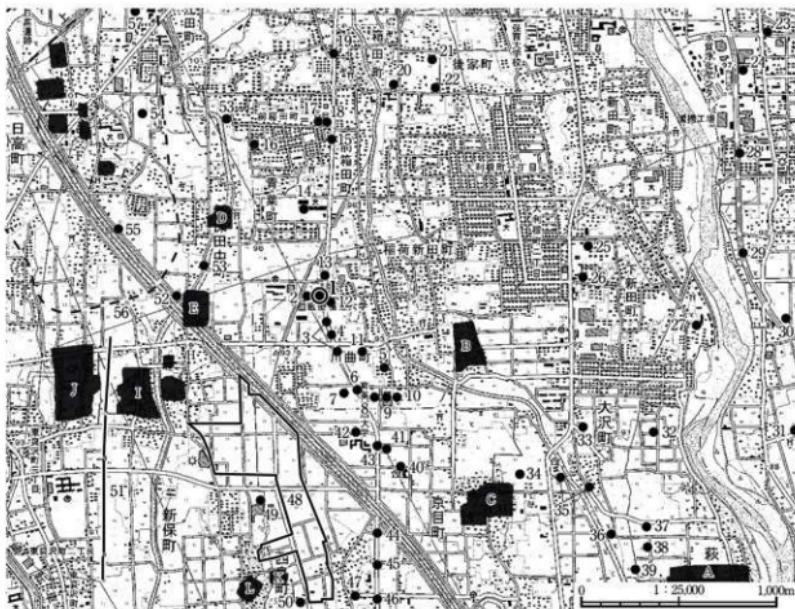
中近世以降 生産跡は、前箱田遺跡（14）、前箱田村西Ⅲ遺跡（18）、中大門遺跡（24）で帶状をした中近世以降の耕作状遺構が検出されており、耕作の痕跡と考えられている。川曲鳥野遺跡（13）では畠跡と思われる畠状

遺構が検出されている。また、本遺跡も含め付近の遺跡では中近世以降の溝跡が多く検出されている。

住居跡としては、前橋台地南部の平坦な水田地域に屋敷跡や環濠遺構群が多く確認されている（A～L）。本遺跡の東側に位置する川曲阿弥陀西遺跡 No. 3 (12) では、掘立柱建物一棟と井戸跡が複数検出されている。

江戸時代初期には、総社城主秋元長朝が水田開発のために天狗岩用水を開鑿した。現在、本遺跡周囲の水田は箱田町にある箱田堰から滻川の水を取水している。水路改修時に建てられた「箱田堰水路改修記念碑」には、箱田堰水路は経年により通水能力の衰えた水路を1985年に改修したことが記されている。また、文化8年（1811年）に天狗岩用水に関わる水争いが起きた頃には、箱田堰水路はすでに存在していた可能性がある。

天明3年（1783年）には、浅間山が噴火したことによって本遺跡周辺にもAs-A軽石が数cm堆積した。川曲柳橋Ⅲ遺跡（4）では、耕地の復旧のためにAs-A軽石を集めて埋めたと考えられる復旧坑が検出されている。



番号	地名	番号	地名	番号	地名	番号	地名	番号	地名
1	福島町高須跡	15	福島町鹿瀬	29	福島町山道跡	43	波上町道山跡	57	鶴見跡
2	福島町鹿瀬	16	前田町鹿瀬	30	会田町鹿瀬(季麥田)	44	鳥居野 ^一 ・春来跡	58	安原城
3	福島町鹿瀬	17	前田町山口西日置跡	31	会田町鹿瀬(萬金田)	45	鳥居野大内置跡	59	中島居候
4	福島町鹿瀬	18	前田町山口西日置	32	蘿原町鹿瀬	46	鳥居野大内日置跡	60	津村伊弉
5	施原町鹿瀬	19	前田町山口鹿瀬	33	大矢鹿瀬	47	鳥居野大村跡	61	南茨尻
6	施原町鹿瀬前跡	20	村前鹿瀬	34	宮ノ原・鬼神御・櫛ノ木・上小路鹿瀬	48	白鳥鹿瀬跡	E	上新保・北屋敷
7	施原町鹿瀬前跡 No. 3	21	坂元町鹿瀬	35	宮ノ原・木ノ内・大矢町の西鹿瀬	49	白鳥山古戸・沢渡跡	F	日高郡・鹿瀬狭狭
8	施原町鹿瀬前跡 No. 4	22	瓦久町鹿瀬	36	蘿原・草堂地蔵跡	50	西島町鹿瀬跡	G	上高野
9	施原町鹿瀬前跡	23	八幡舟町安寺鹿瀬	37	蘿原上・下木丁山鹿瀬	51	新保町鹿瀬	H	上新保・鹿瀬後鹿瀬
10	施原町木丁山鹿瀬	24	中大門鹿瀬	38	蘿原上・下木丁山鹿瀬	52	新保鹿瀬	I	深間跡・鬼束落
11	施原町佐野・鹿瀬 No. 2	25	下新田町鹿瀬	39	新原・朝日・蘇我・新原上・下木丁山・下木丁山鹿瀬	53	新保町中村前鹿瀬	J	日高大・鹿瀬幸橋群落
12	施原町佐野・鹿瀬 No. 3	26	下新田町鹿瀬	40	日高・不動鹿瀬跡	54	新保町中村・馬糞鹿瀬	K	荒原早雲
13	施原町鹿瀬	27	下新田町鹿瀬	41	日高・不動鹿瀬2	55	細井鹿瀬	L	山王原敷
14	施原町鹿瀬	28	難島川町鹿瀬	42	宮子町春鹿瀬	56	日高鹿瀬・高崎市		

III 調査の方針と経過

1 調査範囲と基本方針

委託調査箇所は、学校法人昌賢学園の校舎建設予定地であり、調査面積は1,520 m²である。発掘調査は遺構確認面まで重機（0.45 m³バックホウ）で表土掘削を行い、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、測量・写真撮影の順で実施した。遺構・遺物の記録には、トータルステーション・電子平板を用いて測量・編集を行い、断面図については一部オルソフォトに変換して編集を行った。記録写真は35mmモノクロ・リバーサルフィルムカメラ、デジタルカメラの3種を用いて撮影し、調査区全景についてはドローンで撮影した。

2 調査経過

発掘調査は令和2年3月23日～4月17日にかけて実施した。調査区外に充分な排土場所が確保できないため、0.45 m³バックホウを1台使用して反転調査を行った。まず、3月23日に調査区を設定し、翌日から2日間重機で1区北半分の表土掘削を行った。掘削当初から湧水が著しく、調査区の東壁際に排水溝を掘り、また深掘りした2箇所に水中ポンプを入れて常時排水した。重機によりAs-B軽石1次堆積層上面あるいはその下の畦畔の頭が確認できるところまで掘削した後は、主に鍛籠を用いて人力でAs-B軽石を除去し、畦畔及び水田面を検出した。同時に、溝も順次掘削した。31日に第1面の全景撮影を行い、1区の北半分の調査を終了した。4月2日からは1区南半分の表土掘削を3日間行い、As-B軽石1次堆積層上面まで掘削した。1区南半分の第1面の調

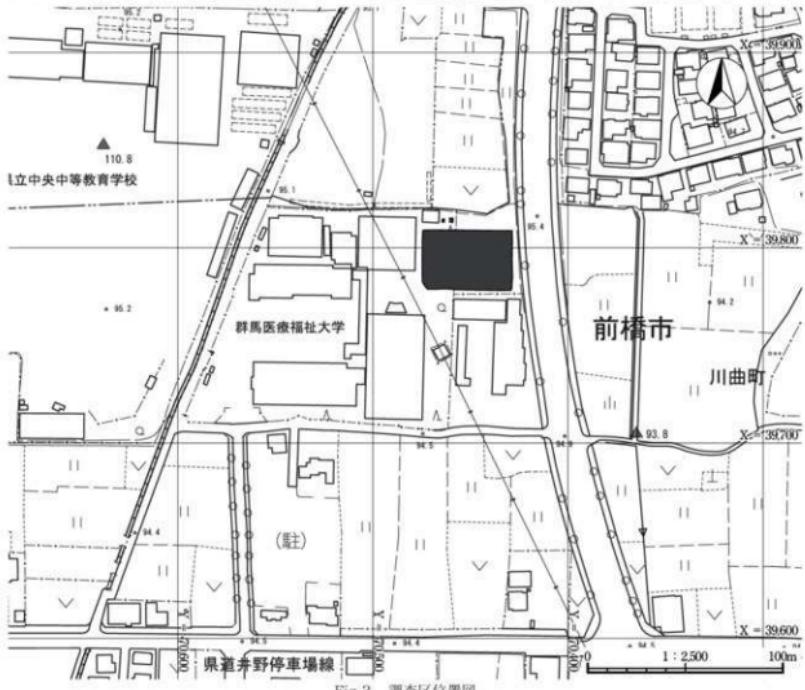


Fig. 3 調査区位置図

査は北半分の調査と同様に鋸歯を用いて As-B 軽石を除去し、畦畔及び水田面を検出しながら溝も同時に掘削した。As-B 軽石を除去する中で検出されたピットは移植ゴテを用いて掘削した。そして、4月8日に1区南半分の第1面の全景撮影を行った。1区北半分の調査の際、調査区中央付近に南北に伸びる窪地があり、深掘りした断面では窪地に向かって Hr-FA 洪水層が落ち込むことを確認していた。この窪地は埋没した旧河道の存在を予測させた。そのため、1区南半分の表土掘削の際にまず調査区南壁沿いに排水溝も兼ねて重機でトレーニングを入れて As-C 軽石一次堆積層下層まで掘り下げた。その結果、As-B 軽石下水田耕作土下層（基本土層Ⅹ層直下）に溝状の堆積（W-6）があること、また As-C 軽石1次堆積層が良好に残存していることを断面で確認した。そして窪地部分は堆積層が落ち込んでいた。そのため、8日に1区南半分の第1面の全景撮影を行った後に、人力で As-B 下水田耕作土層（基本土層Ⅹ層直下）面の溝を掘削し、また、1区南半分の一部分を掘り下げて As-C 軽石一次堆積層下面（第2面）を調査し、自然流路を確認した。その翌日に重機を使用して窪地の一部分を基本層序Ⅺ層上面（第3面）まで掘削した。その結果、基本層序Ⅺ層を底面とする旧河道を確認した。また同日、重機で2・3区を As-B 軽石一次堆積層上面まで表土掘削し、鋸歯と移植ゴテを使用して畦畔及び水田面を検出した。4月10日に2・3区第1面と1区第2・3面の全景撮影を行った。翌11日に調査区の埋め戻しを行ったものの、その後の降雨により転圧作業が延期となった。14日には器材撤収を完了し、17日に転圧作業を行い、調査を終了した。翌週20日から整理作業及び報告書作成を開始した。

IV 基本層序

1区南半分の表土掘削の際、排水も兼ねて入れた南壁沿いのトレーニング断面と、それに平行するように入れた第3面調査時のトレーニング断面を観察し、堆積状況を確認した。I層は現代の水田耕作土である。調査区西側は開発事業主である学校法人昌賢学園の敷地内である。敷地内は整地されており、最上部は碎石を多く含む土で盛土されている。II～III層は中世以降に堆積した。V層は天仁元年（1108年）の浅間山噴火により降下したAs-B 軽石一次堆積層である。残存状況は良好で、調査区全体で堆積を確認した。IV層はB 軽石堆積層上位のフォール・ユニット（桃色細粒火山灰層）で、所々部分的に確認された。上位の浅間山噴火（As-Kk）は確認できなかった。VI層は5世紀末～6世紀初頭頃の榛名山の噴火により降下した火山灰を主体とするHr-FA 洪水層である。成層しない。VII層は3世紀後葉～4世紀前半頃の浅間山の噴火により降下したAs-C 一次堆積層である。残存状況は良い。VIII層は灰白色粘質土で、1号河道の河床面にあたる。調査は、V層直下の旧地表面を第1面、IX層直下の旧地表面を第2面、1号河道の河床面であるX層直上を第3面に設定し行った。

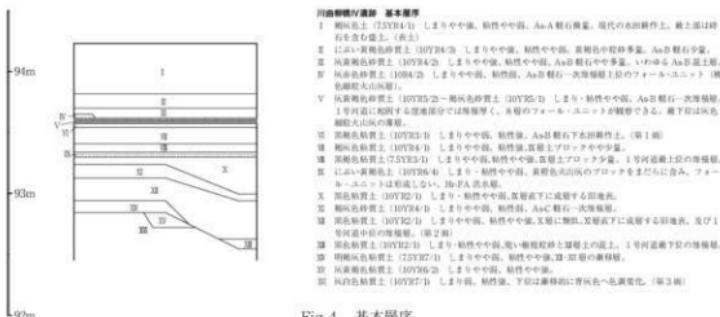


Fig.4 基本層序

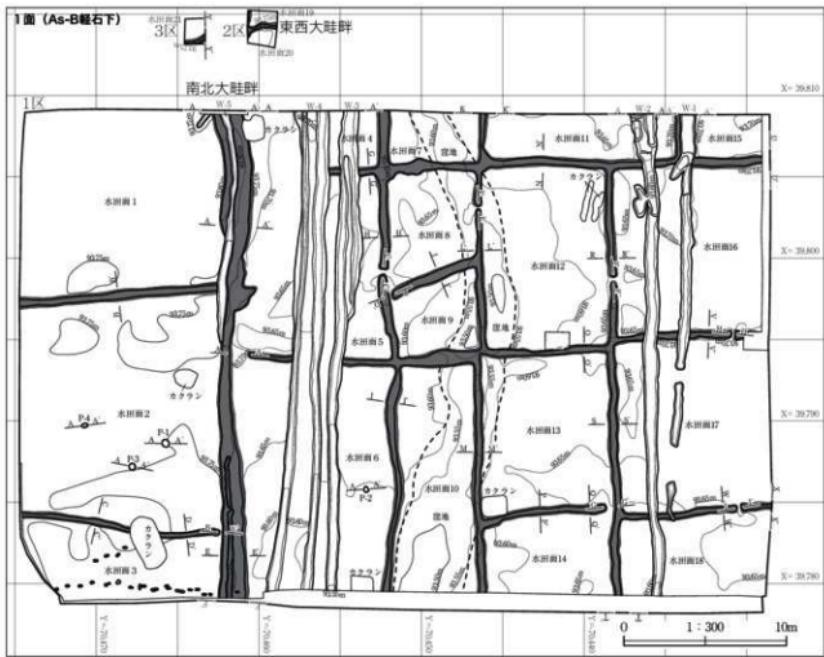


Fig. 5 全体図

V 遺構と遺物

1 遺跡の概要

第1面は、天仁元年（1108年）の浅間山の噴火によって噴出した浅間B軽石（As-B軽石）の一次堆積層直下の面である。遺構は、1区で上位から掘り込まれた中近世以降の溝跡5条とピット3基、As-B軽石一次堆積層直下のピット1基を検出し、調査区全体でAs-B軽石下水田を検出した。水田では南北に伸びる大畦畔を1条と、大畦畔の可能性のある東西方向の畦畔を一条検出した。また、水田耕作土下層（基本土層Ⅶ層）直下において南北方向の溝を1条検出した。第2面は、3世紀後半～4世紀前半の浅間山の噴火によって噴出した浅間C軽石（As-C軽石）の一次堆積層直下の面である。調査区の一部分の調査であったが、自然流路をともなう旧地表面を検出した。第3面は第1面で確認していた窪地をトレント調査し、基本土層Ⅶ層において旧河道を検出した。

2 第1面

（1）溝跡

W-1号溝跡（Fig. 6）

位置 1区東側（X = 39.783～39.808, Y = -70.433～-70.434） 主軸方向 N - 2° - E 規模 長さ（21.95m） 上幅0.96m 下幅0.23m 深さ0.17m 形状等 北から南へ緩やかに走行し、断面は弧状を呈する。重複 As-B軽石下水田と重複している。新旧関係はAs-B軽石下水田→本遺構である。出土遺物 なし 時期 基本層序V層堆積以降に掘削され、基本層序II層堆積時には埋没している。時期は中近世以降と考えられる。

W-2号溝跡（Fig. 6）

位置 1区東側（X = 39.779～39.809, Y = -70.435～-70.437） 主軸方向 N - 1° - W 規模 長さ（29.61m） 上幅1.64m 下幅0.33m 深さ0.37m 形状等 北から南へ緩やかに走行し、北壁断面では新旧2条の溝に細分できるが基本的には1条で、断面は弧状を呈する。重複 As-B軽石下水田と重複している。新旧関係はAs-B軽石下水田→本遺構である。出土遺物 覆土中から須恵器壺が1点出土。 時期 基本層序V層堆積以降に掘削され、基本層序II層堆積時には埋没している。時期は中近世以降と考えられる。

W-3号溝跡（Fig. 6・7）

位置 1区西側（X = 39.779～39.809, Y = -70.453～-70.455） 主軸方向 N - 2° - E 規模 長さ（29.49m） 上幅1.69m 下幅0.36m 深さ0.22m 形状等 北から南へ緩やかに走行し、北側の一部分は2条の溝に細分できるが基本的には1条で、断面は弧状を呈する。重複 As-B軽石下水田と重複している。新旧関係はAs-B軽石下水田→本遺構である。出土遺物 なし 時期 基本層序V層堆積以降に掘削され、基本層序II層堆積時には埋没している。時期は中近世以降と考えられる。

W-4号溝跡（Fig. 6）

位置 1区西側（X = 39.779～39.809, Y = -70.455～-70.459） 主軸方向 N - 2° - E 規模 長さ（29.4m） 上幅2.87m 下幅1.02m 深さ0.14m 形状等 北から南へ緩やかに走行し、北壁断面では新旧2条の溝に細分できるが基本的には1条で、断面は弧状を呈する。重複 As-B軽石下水田と重複している。新旧関係はAs-B軽石下水田→本遺構である。出土遺物 陶磁器の碗が5点出土。 時期 基本層序V層堆積以降に掘削され、基本層序II層堆積時には埋没している。遺物等から時期は中近世以降と考えられる。

W-5号溝跡（Fig. 6）

位置 1区西側（X = 39.794～39.809, Y = -70.461～-70.462） 主軸方向 N - 1° - E 規模 長さ（14.10m） 上幅0.67m 下幅0.22m 深さ0.51m 形状等 北から南へ緩やかに走行し、断面は弧状を呈する。重複 As-B軽石下水田と重複している。新旧関係はAs-B軽石下水田→本遺構である。出土遺物 なし 時期 覆

土に基本層序Ⅰ・Ⅱ層土を含み、検出された溝跡の中ではやや新しい。時期は近世以降と考えられる。

W-6号溝跡 (Fig. 6・7, PL. 2)

位置 1区南東側 ($X = 39,793 \sim 39,778$, $Y = -70,444 \sim -70,445$) 主軸方向 N-1°-E 規模 長さ (14.47 m) 上幅 0.40 m 下幅 0.17 m 深さ 0.24 m 形状等 北から南へ緩やかに走行し、断面は弧状を呈する。重複 1号河道と重複している。新旧関係は1号河道→W-6である。遺物 小径化の進んだ模倣坏の小片が2点底面から出土。時期 Hr-FA洪水層(基本層序Ⅳ層)堆積以降に掘削し、As-B軽石下水田形成以前に埋没している。出土遺物と併せて考えると、古墳時代後期から奈良時代。

(2) ピット

P-1号ピット (Fig. 6)

位置 1区西側 ($X = 39,788$, $Y = -70,465$) 規模 長軸 0.5 m 短軸 0.4 m 深さ 0.04 m 平面形状 円形 重複 なし 出土遺物 なし 時期 1108年に降下したAs-B軽石一次堆積層(基本層序V層)に直接被覆されている。時期は平安時代末期と考えられる。

P-2号ピット (Fig. 6)

位置 1区中央 ($X = 39,785$, $Y = -70,453$) 規模 長軸 0.36 m 短軸 0.29 m 深さ 0.08 m 平面形状 不整形 円形 重複 As-B軽石下水田と重複している。新旧関係はAs-B軽石下水田→本造構である。出土遺物 なし 時期 覆土はいわゆるAs-B混土(基本土層Ⅲ層)を主体とする。時期は中近世以降と考えられる。

P-3号ピット (Fig. 6)

位置 1区西側 ($X = 39,786 \sim 39,787$, $Y = -70,467$) 規模 長軸 0.4 m 短軸 0.4 m 深さ 0.05 m 平面形状 円形 重複 As-B軽石下水田と重複している。新旧関係はAs-B軽石下水田→本造構である。出土遺物 なし 時期 覆土はいわゆるAs-B混土(基本土層Ⅲ層)を主体とする。時期は中近世以降と考えられる。

P-4号ピット (Fig. 6)

位置 1区西側 ($X = 39,789$, $Y = -70,470$) 規模 長軸 0.4 m 短軸 0.3 m 深さ 0.09 m 平面形状 楕円形 重複 As-B軽石下水田と重複している。新旧関係はAs-B軽石下水田→本造構である。出土遺物 なし 時期 覆土はいわゆるAs-B混土(基本土層Ⅲ層)を主体とする。時期は中近世以降と考えられる。

(3) As-B軽石下水田(1~3区) (Fig. 6・7, Tab. 1, PL. 1・2)

被覆層と水田の残存状況 1~3区全域にわたって、水田面が21面検出された。水田面を覆うAs-B軽石一次堆積層(基本土層V層)は厚さ3~17cmで、軽石層上位の桃色細粒火山灰層(基本層序Ⅳ層)は所々部分的に残っている。擾乱6箇所、後世の溝5条とピット3基に削平されているが、残存状況は全体的に良好である。

水田域の地形 地形は1区西側の南北に伸びる大畦畔を境にして様相が異なる。大畦畔西側は北から南へごくわずかに傾斜する。比高差は南北で0.05mである。一方、大畦畔東側は1区中央の窪地付近に向かって北東から南西へと緩やかに傾斜する。比高差は北東から南東では0.05m、北東から窪地の北端部では0.12m、北東から窪地の南端部では0.21m、南西から窪地南端部では0.13mである。畦畔の走行方向と区画 1~3区全体で東西方向7条、南北方向5条検出した。1区西側では南北大畦畔を1条検出した。上幅0.41~1.59m、下幅0.68から1.8m、高さ0.06~0.07mである。また、大畦畔中央を掘りこむ小溝が調査区南壁から8.56mの長さで検出された。周辺の川曲地蔵前遺跡No.3、川曲ア弥陀西遺跡No.2・3でも、大畦畔中央を掘り窓めた溝が検出され、水路という推定がある。しかし、今回検出された溝は南側調査区外まで続いているようだが、大畦畔全体で検出されず、また、溝の途切れる箇所もあるため、同様の溝であるとは断定できない。次に2区では、南北大畦畔の続きとそれに接続する東西方向の畦畔が検出された。この東西畦畔は、幅や高さなどの規模は小畦畔と変わらないが、これまで周辺遺跡の調査で検出された大畦畔と現地表条里を基準にした坪境の推定ライン上に位置する。したがって、調査範囲も狭いためはっきりと断定できないが、東西の大畦畔と考えてよいだろう。この大

畦畔は上幅 0.11 ~ 0.17 m、下幅 0.35 ~ 0.42 m、水田面からの高さは 0.04 m である。次に、1 ~ 3 区全体では、畦畔は東西・南北方向にはほぼ直線的に走向する。ただ、窪地付近では蛇行と斜行が一部見られ、畦畔の高まりは小さい。また、水田面 7 ~ 10 の 2 条の南北畦畔は周囲と比較して間隔が狭くなっているが、それは窪地の落ち込む地形に応じて畦畔を構築した結果と考えられる。耕作土 水田耕作土表層に耕作が行われていなかたことを示す黒色帯は確認されなかった。水田面の状態は、1 ~ 3・21 は表面なだらかで平坦でしまっている。11 ~ 18 はやや凹凸が多く、ややしまっている。4 ~ 10・19 ~ 20 はやや凹凸が多くややわらかい。取配水の方法 水口は 9 箇所検出した。取配水を行う溝は検出されなかった。地形から、南北大畦畔の西側は北から南へ、東側は東北から南西へ、水口のないところは田越しに配水していたと考えられる。足跡 水田面 3 で東西方向の歩行列が 2 列検出された。人間の足跡と考えられる。足跡の形状は残存状況が悪く、一定の間隔であることから足跡と認識するに至った。出土遺物 須恵器・土師器が数点出土したが、いずれも小破片のため図示には至らず。なお、水田面 1 と 2 の間の畦畔と南北大畦畔が交差する場所の大畦畔上に、半分埋設した状態の置石を 1 点確認している。時期 天仁元年（1108 年）に降下した As-B 軽石一次堆積層（基本層序 V 層）に直接被覆されている。時期は平安時代末期と考えられる。

3 第2面 (PL. 2)

第2面は、3世紀後半～4世紀前半の地表面と自然流路を検出した。自然流路は平面不整形で全体に浅く、地表面とともに As-C 軽石に被覆されていた。第1面で確認した窪地は、第2面においても1号河道がほぼ埋没した窪地の状態であった。自然流路は、この窪地へ流れ込んでいたと考えられる。土師器の小破片が1点出土。

4 第3面 (Fig. 7, PL. 2)

(1) 河道

1区南壁際を重機で幅約 2 m のトレンチを掘り、旧河道を検出した。1面で確認した窪地は1号河道の埋没した痕跡であることを確認した。

1号河道 (Fig. 7, PL. 2)

位置 1区中央 ($X = 39.779 \sim 39.809$, $Y = -70.444 \sim -70.452$) 主軸方向 N-1°-E 規模 長さ (31.9 m)
上幅 (9.66 m) 下幅 (3.9 m) 深さ 0.7 m (基本土層直上から) 形状等 北から南へ緩やかに走行し、断面は緩やかな弧状を呈する。重複 W-6 と重複している。新旧関係は1号河道→W-6 である。出土遺物 自然木片 4 点（いずれも 15cm 以下）出土 時期 As-C 軽石堆積層にはすでに埋没過程にあった。As-C 軽石一次堆積層下層の1号河道理没土（基本層序 XII～XV 層）の厚さを考えると、時期は繩文時代頃と思われる。

Tab. 1 As-B 軽石下水田計測表

調査区 面	田 面	グリッド	面積 (m ²)	東西 (m)	南北 (m)	標高 (m)					備考
						NW	NE	中央	SW	SE	
1区	1	$X = 39.797 \sim 39.809$ $Y = -70.461 \sim -70.474$	(144.71)	(121.2)	(10.74)	93.78	93.78	93.77	93.74	93.74	
1区	2	$X = 39.784 \sim 39.798$ $Y = -70.461 \sim -70.474$	(174.72)	(124.1)	(13.74)	93.75	93.75	93.75	93.75	93.73	
1区	3	$X = 39.779 \sim 39.784$ $Y = -70.462 \sim -70.474$	(50.71)	(123.3)	(5.00)	93.75	93.75	93.71	93.73	93.73	
1区	4	$X = 39.806 \sim 39.809$ $Y = -70.452 \sim -70.460$	(28.19)	(8.50)	(3.51)	93.71	93.70	93.70	93.71	93.77	
1区	5	$X = 39.793 \sim 39.805$ $Y = -70.451 \sim -70.461$	41.15	14.92	11.18	93.71	93.73	93.68	93.66	93.60	
1区	6	$X = 39.779 \sim 39.799$ $Y = -70.451 \sim -70.461$	(132.90)	(9.33)	(14.38)	93.66	93.64	93.58	93.61	93.55	
1区	7	$X = 39.805 \sim 39.809$ $Y = -70.446 \sim -70.452$	(17.29)	(5.55)	(3.12)	93.68	93.67	93.60	93.72	93.62	
1区	8	$X = 39.797 \sim 39.805$ $Y = -70.446 \sim -70.452$	32.57	5.27	7.37	93.71	93.65	93.65	93.66	93.60	
1区	9	$X = 39.793 \sim 39.799$ $Y = -70.446 \sim -70.451$	21.97	4.71	5.25	93.66	93.62	93.59	93.61	93.49	
1区	10	$X = 39.779 \sim 39.793$ $Y = -70.446 \sim -70.451$	(69.24)	(4.76)	(13.95)	93.63	93.64	93.54	93.51	93.57	
1区	11	$X = 39.805 \sim 39.808$ $Y = -70.434 \sim -70.446$	(33.78)	(11.64)	(2.66)	93.67	93.73	93.65	93.60	93.71	
1区	12	$X = 39.794 \sim 39.805$ $Y = -70.438 \sim -70.446$	83.30	7.80	10.85	93.55	93.64	93.64	93.59	93.65	
1区	13	$X = 39.789 \sim 39.794$ $Y = -70.438 \sim -70.446$	75.33	8.29	9.31	93.55	93.64	93.64	93.59	93.65	

測量区	面積	グリッド		面積 (m)	東西 (m)	南北 (m)	標高 (m)					備考	
		NW	NE				中央	SW	SE				
1 区	14	X = 39.778	- 39.784	Y = - 70.438	- 70.446	(38.36)	(7.61)	(5.08)	93.59	93.68	96.62	93.57	93.64
1 区	15	X = 39.806	- 39.808	Y = - 70.429	- 70.433	(10.82)	(4.10)	(2.52)	93.72	93.71	93.69	93.71	93.72
1 区	16	X = 39.795	- 39.805	Y = - 70.429	- 70.438	(9.55)	(9.14)	(10.00)	93.64	93.72	93.69	93.69	93.71
1 区	17	X = 39.783	- 39.795	Y = - 70.428	- 70.438	(95.99)	(9.66)	(9.79)	93.69	93.71	93.67	93.62	93.68
1 区	18	X = 39.778	- 39.784	Y = - 70.428	- 70.435	(45.84)	(6.82)	(5.31)	93.63	93.67	93.65	93.61	93.65
2 区	19	X = 39.814	- 39.815	Y = - 70.458	- 70.460	(1.90)	(1.78)	(0.94)	93.73	93.74	93.75	93.69	93.74
2 区	20	X = 39.813	- 39.814	Y = - 70.458	- 70.460	(1.30)	(1.71)	(1.15)	93.73	93.79	93.75	93.72	93.75
3 区	21	X = 39.813	- 39.814	Y = - 70.463	- 70.464	(1.52)	(1.26)	(1.44)	93.70	93.71	93.71	93.70	93.71

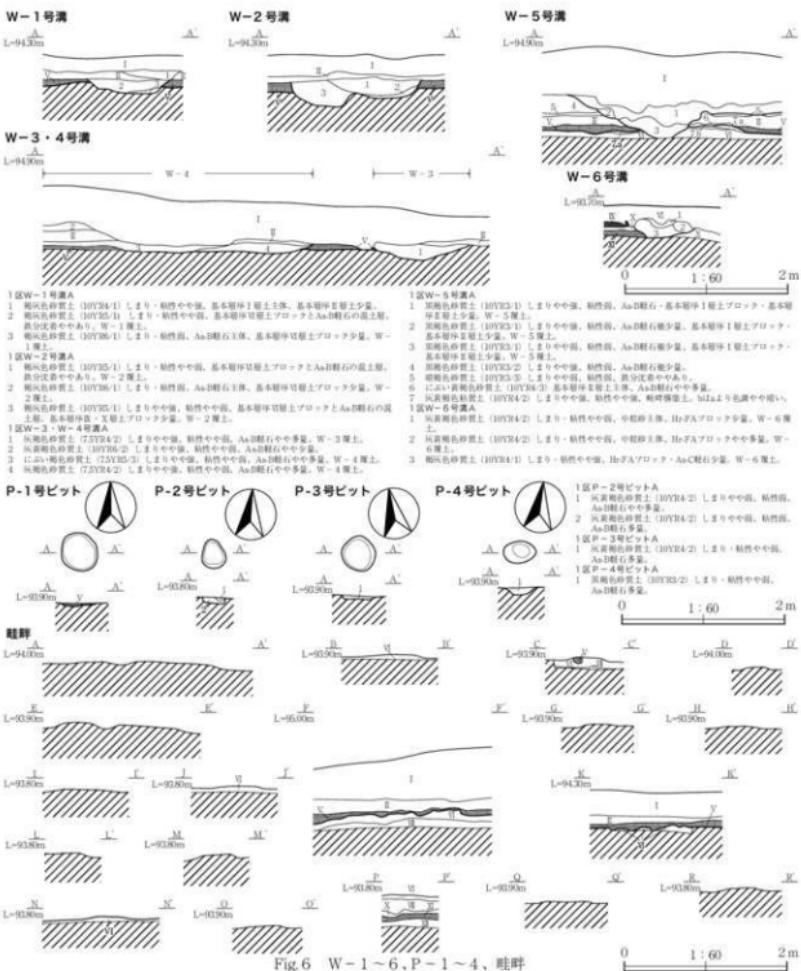
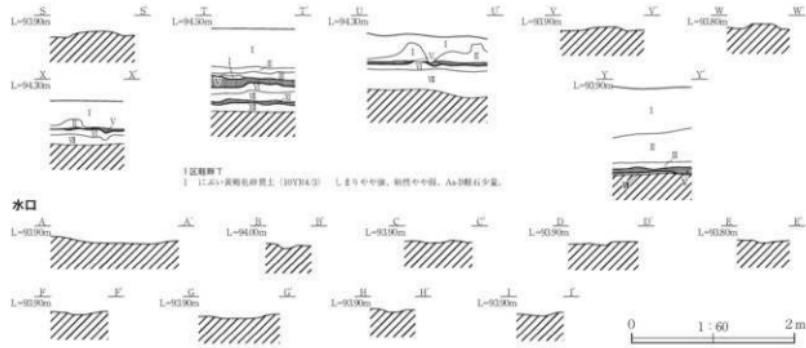
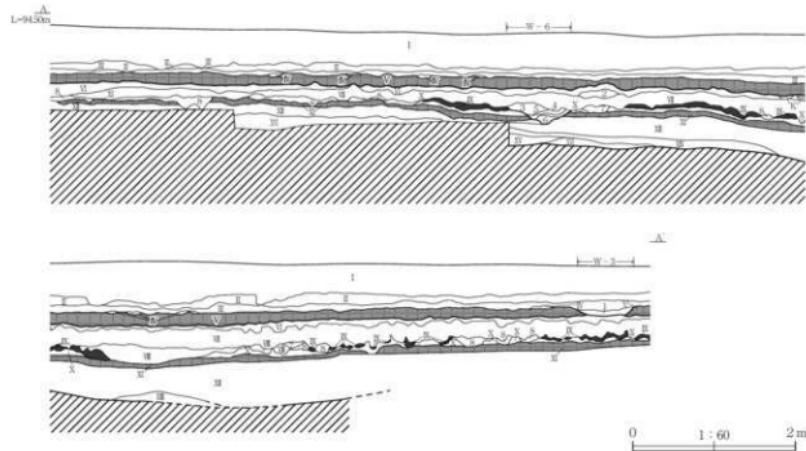


Fig. 6 W=1~6, P=1~4, 蜂群



1号河道



1 应用更新示例

Fig. 7 W-3·6, 畦畔、1号河道

VI 発掘調査の成果と課題

川曲柳橋Ⅳ遺跡周辺は新前橋駅川曲線道路改良事業や店舗建設に伴う発掘調査によって、天仁元年（1108年）降下のAs-B軽石に直接被覆された水田遺構の検出事例が増加している。今回の調査もこの水田遺構の検出が主眼であった。さらに、調査の過程で1区中央部に窪地を確認し、調査区の一部分を掘り下げて下層の調査を行った。まずははじめに、本遺跡の調査成果を概観する。

1 調査成果の概要

古墳時代以前 As-B軽石直下の面で確認した窪地の下層から1号河道を検出した。周辺では、新保田中村前遺跡で弥生時代の遺物を伴う河跡が検出され、また川曲地蔵前遺跡No.3遺跡では、遺物の出土はないが、縄文～弥生時代と想定される河跡が検出されている。⁽¹⁾ 本遺跡の1号河道は遺物の検出はなかったが、層位等から縄文時代と思われる。埋没土・河床面とともに粘質土で、礫等は確認されず、断面形状は緩やかな弧状を呈することから、流れの緩やかな小川であったと推測する。Hr-FA洪水層の堆積する6世紀初頭頃にはほぼ完全に埋没している。下層のAs-C軽石層直下では、旧地表面と埋没途中の1号河道に向かって流れる自然流路を検出した。自然流路の平面形状は不整形で、断面は弧状を呈するが全体に浅い。常時水が流れているのではなく、降雨時の一時的な水の通り道であったと思われる。

As-B軽石下水田耕作土層（基本層序VI層）から下位の層は、火山噴火に起因する堆積物を除くと全て粘質土であり、古墳時代以前の本遺跡は人間の活動の希薄な湿地であったと考えられる。今回自然科学分析は行っていないが、隣接する川曲柳橋II遺跡におけるプラント・オーバル分析では、稲作が開始される以前の遺跡周辺は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと推定されている。⁽²⁾ したがって、隣接する本遺跡も同様の環境であったと考えてよいだろう。なお、As-C軽石堆積層直下・Hr-FA洪水層直下の層は黒色を呈しているが、これはヨシ属等の植物が火山噴出物によって被覆されて腐食したためと考えられる。

古代 6世紀初頭頃のHr-FA洪水層堆積後から8世紀の間に掘削されたW-6号溝跡を検出した。周辺の京目・不動西遺跡2・新保田中村前遺跡などでは6世紀初頭のHr-FAあるいはHr-FA洪水層に覆われた小区画水田が検出されている。⁽³⁾ 深掘りした1区南壁の断面では、小区画水田畦畔の高まりは確認できなかつたが、Hr-FA洪水層とその上下層を擾拌する耕起層と考えられる土層を所々確認した。今回の調査で確認した最も古い人为的痕跡は、この耕起層とW-6号溝跡だが、これらが水田耕作に関係するかは不明である。また、平安時代末期のAs-B軽石下水田は1～3区全域で確認した。水田の詳細については後述する。

中世以降 溝跡5条、ピット3基を検出した。W-5号溝を除いて、この時期の遺構はAs-B軽石堆積後に掘削され、基本層序II層堆積時には埋没している。W-5号溝は覆土に表土層の土を含むため、比較的新しい。2～4号ピットの覆土はいわゆるAs-B混土を主体としており、3基の時期は近いと考えられる。

2 As-B軽石下水田

坪交点の検討

古代には条里制があるが、As-B軽石下水田は条里型地割に基づいて開発されたと考えられている。Fig. 8は、昭和43年の前橋市都市計画図に周辺遺跡のAs-B軽石下水田の全体図を重ね、検出された大畦畔を基準に109m間隔のメッシュ（条里型地割推定線）を組み、近世以降の用水と明治時代の小字を示した図である。川曲村の小字は伊勢・上之宮・飯玉前・阿弥陀西・宅地添・琴平西・地藏前・毘沙門前・觀音前である。箱田境・中ノ免・堰西・柳橋・新保境・中堀添は荷舟新田村の飛地である。東沖・前沖・堀向は新保田中村の小字で、木ノ下・張近は箱田村の小字、村西・田中境・川曲境は前箱田村の小字である。字境を見ると、堰西・柳橋・新保境・中堀添の村境は東西4町・南北5町の条里型地割が残存している。堰西と新保境、柳橋と中堀添の間も小字境として合わせて東西4町の地割が残存している。また、毘沙門前も1町四方の地割が小字境として残存している。

発掘調査によって検出された条里型地割推定線に重なる大畦畔は、東西方向は本遺跡と川曲鳥野遺跡と川曲阿弥陀西遺跡 No. 2 の 3 条、南北方向は本遺跡と川曲地蔵前遺跡 No. 3 と川曲地蔵前 II 遺跡・川曲阿弥陀西遺跡 No. 2 ・川曲阿弥陀西遺跡 No. 3 と地蔵前遺跡の 4 条である。

本遺跡では坪交点部分そのものは調査区外となっているが、東西・南北大畦畔を調査区外に延長して交差した部分を坪交点 A とし、川曲阿弥陀西遺跡 No. 2 で確認された坪交点を B とする。条里型地割推定線を重ねると、A と B は東西方向に 2 町、南北方向に 3 町離れている。実際に A B 間の距離を測ると、東西方向は約 222 m、南北方向は約 333 m で、1 町が約 111 m という計算になる。しかし、隣接する大畦畔の間隔は、本遺跡と川曲鳥野遺跡の東西大畦畔では約 109 m、川曲地蔵前 II 遺跡と川曲地蔵前遺跡 No. 3 の南北大畦畔では約 109 m、川曲地蔵前遺跡と地蔵前 II 遺跡の南北大畦畔では約 108 m であり、隣接する大畦畔はおよそ 1 町（約 109 m）の間隔となっている。また、実際の大畦畔は必ずしも直線とは限らない。本遺跡の大畦畔は 1 区北壁付近でやや蛇行しており、川曲阿弥陀西遺跡 No. 2 の南北大畦畔はランクする部分がある。⁶⁾ おそらく地形的な制約等により、大畦畔を構築する部分があったと考えられる。

本遺跡の東西大畦畔については小畦畔と幅が同じで、調査範囲も狭かったため、調査時は大畦畔という認識はなかったが、条里型地割推定線に重なるため大畦畔と判断した。東西大畦畔は現地表の耕地境と比較するとやや南にずれるが、川曲鳥野遺跡の東西大畦畔との距離は約 109 m となっている。川曲鳥野遺跡の東西大畦畔も耕地境と比較するとやや南にずれているので、古代から現代に至るまで、坪境は 1 町の間隔を保ちながらも、全体的にやや北に移動したと考えられる。本遺跡の南北大畦畔については、最大下幅 1.8 m で大畦畔よりも幅が広い。大畦畔の中央付近は南・北端部と比較して幅が狭くなっているが、これは水口のところで給排水の際に水が集中するため次第に畦が削られていったのではないかと想像する。現地表の耕地境は、南北大畦畔と比較するとやや東にずれているが、部分的であり、南側の調査区外の直線的な耕地境と比較すると地割は現代まで保持されていたといえる。

次に周辺の遺跡で確認された大畦畔について述べたい。川曲阿弥陀西遺跡 No. 2 の東西大畦畔上は、小字境が南側に渦曲するが、渦曲していない東側部分は条里型地割が残存している。川曲地蔵前遺跡 No. 3 の南北大畦畔は字境に位置しており、地割が残存している。また、地蔵前 No. 3 の調査区から北側は南北方向におよそ 7 町の村境がある。この境は条里型地割推定線からはやや西にずれているものの、南北方向の地割が残存しているといえる。川曲柳橋 II 遺跡では、条里型地割推定線上には 10 号溝跡が検出されている。この溝跡は両脇に畦畔を構築しており、As-B 軽石下水田に伴う水路と考えられている。⁷⁾ 川曲阿弥陀西遺跡 No. 3 では条里型地割推定線上に大畦畔は確認されていないが、As-B 軽石下水田を切り、若干の時期差はあるものの平安時代末の所産とされる 18・19 号溝跡が検出されている。⁸⁾ 18・19 号溝は深さ 5 cm と浅く、柳橋 II 遺跡の 10 号溝と比較して小規模であるが、南北方向の窪地の上に掘られている。おそらく、阿弥陀西遺跡 No. 3 の西側の南北方向の坪境は大畦畔というよりも水路の機能を有していた可能性の方が高いと思われる。

川曲地蔵前 II 遺跡・川曲阿弥陀西遺跡 No. 2 ・川曲阿弥陀西遺跡 No. 3 の南北大畦畔は、対応する現地表境は部分的に残っているが、明確に南北の地割ラインは確認できない。字境でもないので、中世以降～明治時代以前にこの南北地割ラインは認識されなくなり、失われたと考えられる。地蔵前遺跡は、調査区含め南側は南北の地割が残存している。一方で、調査区北側は条里型の地割が確認できない。この辺りは前橋台地上の微高地あるいはその縁辺にある。⁹⁾ 図のように昭和 43 年には建物が建っており、明治時代の小字境もすでに建物の領域に影響を受けている。したがって、明治時代以前の段階で開発によって条里型地割は失われたと考えられる。

坪内区画の検討

本遺跡で確認した東西大畦畔の北側の坪を①、南側の坪を③、南北大畦畔の西側の坪を②とする。まず、①は川曲鳥野遺跡の調査区中央の南北畦畔が直線的に走行する。これを長地型あるいは半折型を構成する畦畔とする

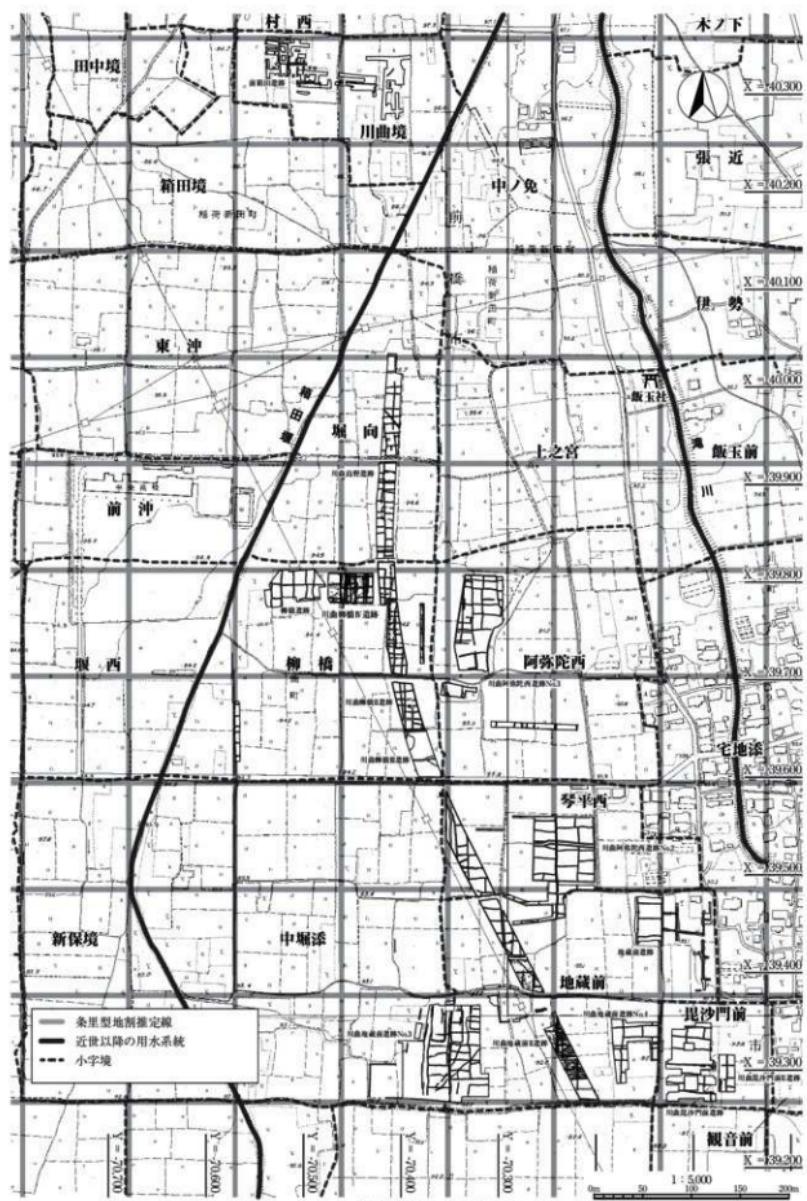


Fig. 8 本遺跡周辺の条里型地割

と、南北方向に10等分した長地型か、東西方向に2等分して南北方向に5等分した半折型と考えられる。隣接する北側と南側の坪内区画の様相から判断すると、長地型で内部を地形に合わせて適宜小畦畔で区画している可能性が高い。1枚の水田内に必要に応じて作られる臨時の「手畦」などと呼ばれる畦畔を、水の回りを見ながら造っていたと考えられる。次に②は、畦畔の間隔から半折型ではないといえる。東西畦畔の間隔は15 m・13 mほどで長地型の間隔よりやや広いが、南北畦畔の方は長地型の間隔と一致する部分もある。したがって、南北方向に10等分した長地型で、畦畔の間隔がやや崩れた形と推定される。③は本遺跡の東西小畦畔3条と川曲柳橋Ⅱ遺跡の東西小畦畔3条が繋がるため、東西方向の規制が強いように見える。やや蛇行する部分もあるが、畦畔の間隔は3条間の幅もおよそ一定で、長地型に近い。ただ、南北畦畔も直線的ではなく直線的に走行しているように見える。いずれにせよ、長地型であることは間違いないだろう。全体として、①～③の区画は緩やかな傾斜地であるから、傾斜の程度に応じて区画する部分があり、畦畔の蛇行も地形に応じた結果と考えられる。

大畦畔の特徴

南北大畦畔4条のうち、3条は小畦畔よりも幅が広いが、東西大畦畔の方は3条のうち2条は小畦畔と比べて規模は変わらない。当時も、遺跡の地形は基本的に北から南へ緩く傾斜しており、水口のない水田は小畦畔の上を水がオーバーフローして順次隣の田へ流す田越しによって北から南へ配水していたと考えられる。小畦畔と比べて規模が変わらないのは、大畦畔も越えて配水するためであったのかもしれない。

大畦畔の機能は土地を区画することだが、それ以外の機能も有していた。川曲地蔵前遺跡No.3と川曲阿弥陀西遺跡No.2・3の南北大畦畔は中央に溝が掘られており、川曲阿弥陀西遺跡No.2の坪交点部分の大畦畔は5箇所所が切られ、水口が付いている。高崎市内においても大八木水田遺跡、日高遺跡、西横手遺跡群、上並榎下松II遺跡、並榎北II・III・IV・V遺跡などで中央に溝をもつ南北大畦畔が確認されており、これらの溝は水路と考えられている。前橋市の下新田中沖遺跡で確認された並列畦間に溝をもつ坪境の遺構も、中央に水路を持つ大畦畔の可能性がある。

また、中里正憲氏は砂町遺跡で確認された大畦畔を、土壤の特徴から、畦畔を構成する土壤に砂が多く混入し、遺物が破片ながら比較的出土するもの（1類）、畦畔を構成する土壤が水田耕作土と同質の粘質土であるもの（2類）の2種に分類した。そして、2類は水田の区画や農道としての機能が大きい大畦畔とし、1類は2類の機能以外の、日常的に使用された生活道としての機能が大きい大畦畔であると推定した。本遺跡の南北大畦畔は最大では上幅159 mあるが最小では上幅0.41 mほど狭い。また、大畦畔を構成する土壤も、水田耕作土とは同質の粘質土であった。したがって、区画と農作業の道としての機能を有する2類の大畦畔と考えられる。

用水路について

現在、本遺跡周囲の水田は箱田町にある箱田堰から滻川の水を取水している。近世に、水量確保のため開鑿された天狗岩用水は滻川を流路の一部に含んでいる。この用水の開鑿以前は、榛名山を源とする河川を利用していたと考えられるが、現在のような水量があったかは不明である。遠方の水量のある河川から取水してきたか、あるいは滻川を含む複数の河川から取水していたと思われる。

今のところ本遺跡付近では、As-B軽石下水田に伴う大規模な幹線用水路は確認されていないが、川曲柳橋Ⅱ遺跡の水路とされる10号溝と、前項で述べた大畦畔中央の溝は、幹線用水路から枝分かれした支流の用水路と考えられる。10号溝は幅上端8.70～9.83 mで、周囲の水田や南方の水田の配水と排水を担っていたと考えられる。一方で、大畦畔中央の溝は規模の小さな水路であり、川曲阿弥陀西No.2の水口の付き方から、配水を担っていたと考えられる。また、本遺跡周辺の全ての大畦畔に確認できる遺構ではないので、田越しの配水と並ぶ1つの配水方法であったと考えられる。

大畦畔中央の溝の長さは、川曲地蔵前遺跡No.3では約1町、川曲阿弥陀西遺跡No.2は北側の川曲阿弥陀西No.3の大畦畔まで水路が続くと仮定すると約200 mである。水路付き大畦畔の全容が分からないので具体的な

位置は分からぬが、川曲ア弥陀西遺跡 No. 3 の大畦畔の北側あたりに規模の大きな幹線用水路があることが予想される。また川曲鳥野遺跡では、脇に畦上の高まりをもつ溝が 2 条検出されており、水田に伴う水路と考えられている。³⁰⁾ 小畦畔を切りながら斜行する 1 条は、北西から南東へ流れていたと考えられる。したがって、川曲鳥野遺跡の北あるいは西側に幹線用水路の存在が予想される。また、本遺跡では南北大畦畔の西側は東側より全体的に標高が高い。隣接する柳橋遺跡と合わせると、西に向かって全体的に標高が高くなっている。したがって、こちらも西側に幹線用水路の存在が予想される。

注

- (1) 財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990、前橋市教育委員会 2015
- (2) 前橋市教育委員会 2005
- (3) 財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988、財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990、高崎市教育委員会 2015
- (4) 田中 2002
- (5) 近世以降の用水系統、小字、神社については『東村史記』、『新高尾村全国』、『京ヶ島村全国』、『上野国郡村誌』5 群馬郡(2)、『東村誌』、『群馬県史』通史編 2・資料編 10 を参考にした。
- (6) 前橋市教育委員会 2013
- (7) 前橋市教育委員会 2005
- (8) 前橋市教育委員会 2017
- (9) 群馬県史編さん委員会 1990
- (10) 金田 2000
- (11) 工業 1991
- (12) 高崎市教育委員会 1981、櫻井・井手田・横倉 2000
- (13) 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998
- (14) 中里 2000
- (15) 昔代遺跡群の条里型水田跡では、自然堤防上に築かれた基幹用水から大畦畔上の枝用水へと分岐して配水する。ただ、枝用水の数は少なく、水田内の配水は基本的に田越しと考えられている。市川 2002、長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター 1999
- (16) 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2005 『川曲鳥野遺跡』

引用・参考文献

論文等

- 東村誌編纂委員会 1959 『東村々誌』
市川隆之 2002 「善光寺平南部の条里遺構」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第 96 号、国立歴史民俗博物館
岡田隆夫 1991 「特論 上野国の条里制」、『群馬県史』通史編 2 原始古代 2 群馬県史編さん委員会
金田章裕 2000 「地割の起源」、『古代史の論点 1』 小学館
群馬県史編さん委員会 1990 「付図 2、群馬県内主要地域の地形分類図」、『群馬県史』通史編 1 原始古代 1
群馬県史編さん委員会 1978 「解説 植野田の岩塼はか」、『群馬県史』資料編 10 近世 2 西毛地域 2
工業普通 1991 『水田の考古学』 東京大学出版会
櫻井衛・村井田正明・横倉賛一 2000 「4 長間山 B 鉛石 (As-B) 下の水田・畠 (47・49・56・59・61)」、『新版 高崎市史』資料編 2 原始古代Ⅱ 高崎市史編さん委員会
田中 雄 2002 「群馬県内条里制研究資料の収集と解題」、『研究紀要』20 群馬県埋蔵文化財調査事業団
中里正明 2000 「砂町遺跡における大畦畔の調査例」、『群馬考古学手帳』10 群馬土器研究会
萩原 進監修 1980 『上野国郡村誌』5 群馬郡(2) 群馬県文化事業振興会
報告書等
- 財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988 『新保道路Ⅱ』
財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990 『新保田中村前道路Ⅰ』
高崎市教育委員会 1981 『日高道路発掘調査報告(Ⅲ)』
高崎市教育委員会 2015 『京口・不動西遺跡Ⅱ』
長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 26 更埴条里遺跡・星代遺跡群』古代 1 編
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998 『川曲見沙門前遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998 『下新田中沖遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998 『下新田中沖Ⅱ遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2005 『川曲鳥野遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2005 『川曲城壁前Ⅱ遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2005 『川曲城壁前Ⅲ遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2006 『川曲柳橋Ⅲ遺跡』
前橋市教育委員会 1994 『柳橋遺跡』
前橋市教育委員会 2005 『川曲柳橋Ⅱ道路』
前橋市教育委員会 2010 『南部拠点地区道路群 No. 5』
前橋市教育委員会 2013 『川曲阿弥陀西遺跡 No. 21』
前橋市教育委員会 2015 『川曲地蔵前遺跡 No. 3』
前橋市教育委員会 2016 『川曲地蔵前遺跡 No. 4』
前橋市教育委員会 2017 『川曲阿弥陀西遺跡 No. 3』
前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988 『地蔵前遺跡』



1区北侧 As-B轻石下水田面全景（上为北）



1区南侧 As-B轻石下水田面全景（上为北）



2・3区 As-B軽石下水田面全景（北から）



1区北側大畦畔全景（北から）



1区南側大畦畔全景（北から）



水田面足跡全景（西から）



W-6号溝全景（北から）



1区2・3面全景（北東から）



1区1号河道全景（北から）



調査区南壁断面（北から）

報告書抄録

カタカナ	カワマガリヤナギバシヨンイセキ
書名	川曲柳橋Ⅳ遺跡
副書名	校舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	-
シリーズ名	-
シリーズ番号	-
編著者名	茂木佑輔
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町1丁目15番地3
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市総社町3丁目11番地4
発行年月日	2020年7月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
川曲柳橋Ⅳ遺跡	前橋市川曲町 153-1ほか	10201	1A252	36°35'61"	139°0'48"	20200323 ～ 20200417	1520m ²	校舎建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川曲柳橋Ⅳ遺跡	生産 その他	平安時代 中近世	As-B軽石下水田溝 ビット	6条 4基 須恵器 土師器 陶磁器	天仁元年（1108年）に降下したAs-B軽石に直接覆われた条里型地割の水田跡。

川曲柳橋Ⅳ遺跡

群馬県にむか群馬文化財発掘調査報告書

2020年7月22日 印刷

2020年7月31日 発行

発行

前橋市教育委員会文化財保護課
平371-0853 群馬県前橋市能社町3丁目11番地4
TEL 027-280-6511

編集
印刷

技研コンサル株式会社
朝日印刷工業株式会社
